

会員コラム

東京タワー展望台

2009年、関東地方では民放各局の開局50周年企画が数多く行われている。昨年暮には、東京タワー50歳を祝うイベントが開催された。ここであらためて東京タワーの電波塔としての役割を思い出す。

「東京タワー展望台リニューアルプロジェクトにおける“静かさ創出による音環境デザイン”」が、当学会の環境デザイン賞を受賞したのは平成14年度。既に6年の月日が流れた。この間、東京タワーを舞台にした映画や小説が次々とヒットしたことも相まって、東京タワー展望台の人気は急上昇した。リニューアルプロジェクトに関わった一人として、嬉しい限りである。

東京タワー建設時を振り返る資料や企画はたくさんあるが、今後リニューアル時を振り返ることは果たしてあるだろうか。そう考えた時、あのリニューアルプロジェクトにも、様々なドラマがあったことを思い出し、少しだけこのコラムに書き記しておきたいと思った。

このプロジェクトは設計コンペで始まった。私はコンペへの参加に向けて、プロジェクトのメンバーと共に何度も東京タワーに足を運び、その都度不思議な魅力にとりつかれていったように思う。なつかしさを親しみもあったが、何よりも東京タワーから

の展望は、どんな展望台からの眺望よりもすばらしかった。だからこそ、主役である“展望”を大切に作るデザインにしたいと思った。大展望台に吹抜けをつくり、ロープウェーのようなライドを走らせるプランも飛び出した。さすがにこれは採用されなかったが、想いは通じたのだろう。我々はコンペを勝ち抜くことができた。

大変だったのはそれからのこと。展望台の運営を休むことなく工事が進められたため、資材を運ぶエレベーターは夜間しか使用できないが、オープニングイベントの日程は何があってもずらせない。昼夜逆転の毎日。私は“にわかエレベーターガール”となって、真夜中に職人さんを乗せたエレベーターの運転を何度となくしたものである。工事の喧騒が去った夜明けの展望台で、一人環境演出音の現場調整に走り回ったのがつい昨日のことにように思い出される。

工事中は辛い事も多かったが、展望台から見る日の出の美しさには、何度も励まされた。大都会東京が眼下に広がるその先に見える海が、少しずつ紅く染まっていくあの光景は、忘れられない。

環境デザイン賞の盾は、大展望台の一角にひっそりと飾られている。皆さんも、かくれんぼでもするつもりで、見つけに行ってみてほしい。

(船場ひさお)